

2025年度（第2次） 神戸市外国語大学大学院入学試験
日本アジア言語文化専攻 日本文化領域
出題意図

(1)

日本近現代の文化史・思想史、および社会学・歴史学の基本用語を問うもの。

(2)

(ア) 日本近代の文化史・思想史を研究するうえでは当然、当該期の史料を読解していくことが不可欠となるが、その史料の文体が持つ歴史的意義への理解度を問う問題。あえて有名な言文一致体の登場ではなく、明治期における漢語・漢文的な文章表現普及の意義を問うたのは、斎藤稀史『漢文脈と近代日本』（2007年）を始めとする一連の近世～近代思想史、近代文学研究の動向を把握できているかどうかを聞いたかったからである。近世後期（特に寛政期）以降の儒学的知識の普及・制度化の流れの延長線上に明治期の文体が位置づく点、西洋由来の概念や学術用語の翻訳に際しては漢語・漢文表現を用いる方が合理的であった点、などについて記述できていることが望ましい。

(イ) 20世紀を対象とした歴史研究を行ううえで知っておくべき、いわゆる総力戦体制論への理解度を問う問題。「総力戦」が20世紀の日本におよぼした影響の範囲をめぐっては、学界においても様々な見解が存在する。例えば、山之内靖ほか編『総力戦と現代化』（1995年）は、1930年代に形成された総力戦体制がそのまま戦後体制へと継承されていった点を強調するのに対し、高岡裕之『総力戦体制と「福祉国家」』（2011年）は両者の断絶を強調する。ゆえに影響の範囲に関しては基本的に、個別の対象に即しながら具体的かつ論理的に正しく記述できていれば良く、学説の相違などにまで踏み込んだ記述ができていれればなお良い。「総力戦」の定義に関しては概ね、前線の軍隊のみならず、その国の社会・文化・経済などのあらゆる領域を戦争目的のために再編する、国家の総力を結集した戦争である旨が記されていれれば良い。

(ウ) 近年関心が再び高まりつつあるエコロジー思想を念頭に置きながら、社会と自然環境の関係をマクロな視座から把握できているかどうかを問うた。設問ではいわゆる「高度経済成長期」以後に時代を設定し、各種公害に関する基本情報と、その対応について記述させた。具体的には、たとえば、いわゆる「四大公害」や、市民運動・エコロジー運動（エコロジー思想や「持続可能な開発」など）だけでなく、行政側の対応（環境庁と公害対策基本法）などの記述が求められる。さらに、2015年以降のいわゆるSDGs（Sustainable Development Goals）についても記述してほしい。